

紀元二千六百年と宮崎の綴方教育

— 皇紀二千六百年記念児童文集『日向』をめぐって —

菅 邦男

(宮崎大学教育文化学部)

昭和十五(1940)年十二月二十五日、神武天皇即位二千六百年を記念して、皇紀二千六百年記念文集『日向』が宮崎県教育会から発行された。高等科一年の文集である。

同年の『宮崎県教育』(宮崎県教育会機関誌)七月号には、「紀元二千六百年記念文集」各市郡編纂委員の早期決定を促す記事が掲載されている。そこには既に決定した編纂委員の名前が記されているが、木村寿や今村梅夫、平田宗俊、椎葉重人など、当時尋常科で綴方を指導していた教師たちが顔を揃えている。したがって、尋常科の記念文集も発行されたはずであるが、未だ発見できていない。

ここでは文集『日向』を通して、宮崎県における紀元二千六百年と綴方教育との関係、及び綴方の特徴について見ていくことにする。

文集『日向』は、巻頭に宮崎県教育会長・男爵菊池武史の言葉「日向の少年少女諸君へ」を戴せ、特選五十四篇、佳作五篇、一般作品三十篇を収録している。特選と佳作の間には「特別読物」として、所謂宮崎県の聖跡が紹介されている。

特選は、西諸県郡、東諸県郡、児湯郡、東臼杵郡、西臼杵郡、宮崎市、都城市、延岡市、宮崎郡、南那珂郡、北諸県郡から各五篇が選ばれている。ただし南那珂郡は四篇である。

特選五十四篇の内、約八割は何らかの形で時局に関係した内容の綴方である。その多くは、型にはまった画一的なものである。

二千六百年

向山南校 女子

輝かしい紀元二千六百年を迎えてから、も早八ヶ月になりました。紀元二千六百年の紀元節の日には、私たちは学校で、目出たく拝賀式がすんで後、運動場で先生と共に建国体操をしたり、運動をしました。それがたつた今のやうであつたが、もう八ヶ月もたちました。意義深い皇紀二千六百年の元日をあとにして、今年こそはと一生けんめい学んできました。思へば神武天皇が大和の橿原の宮で天皇の御位につかれて、日本国のどだいをたてられてから二千六百年といふ年をとつて来ました。我が国の始りは、天照大神が皇孫瓊々杵尊をこの国へお降しになられました時であります。その後彦火々出見尊、鷦鷯草葺不合尊の御三代の間、日向の私共の住んである高千穂の地にお住ひになつて、我が国をお治めになられました。ほんとうに我が高千穂は我が国のはじまりである立派な土地であります。神を敬ふ我が国は、萬世一系の天皇をいただき、天皇さまは臣民を我が子の様にいつくしみ給ひ、民は忠孝を忘れないで国運はます〜盛んになつて来ました。この様に立派な国体は世界中には日本よりは外にありません。こんなよい国に、その上皇祖発祥の靈地に生

れ合せた 私共は有り難い事であります。

今日支那事変が始まつてますが、支那の子供は学校にも行けず、やぶれた着物を着て、兵隊さん達の残りの御飯をもらつて食べて居ると言ふ話さへ聞くのに、私達はやすらかに、何の心配もなく学校に来て、勉強が出来、一日一日を楽しく送ることが出来るのは、天皇陛下の御かげと、兵隊さんのおかげと有り難く思つて居ます。

この立派な国に生れ合せた 私達は、幸福であると思ひ、しつかり勉強して、二千六百年の強い子供にならうと誓ひます。

日本は他にない立派な国であり、そういう日本に、しかも皇祖発祥の地日向（宮崎県）に生まれ合せたことは有り難いことである、自分たちが毎日を何の心配もなく過ごせるのは天皇陛下と出征兵士のおかげである、体を鍛え、しっかり勉強して立派な子供にならないといけないというのが時局を描いた綴方のパターン（型）である。

山中恒著『子どもたちの太平洋戦争』^{#1}の中の綴方「紀元二千六百年」では、学校で「日本は一度も外国に負けたことのない立派な国である。それは天皇陛下のおかげである」と教えられ、家では「日本のような立派な国に生まれたことは実に幸せなことだ、それに報いるためには体をきたえ、一生懸命勉強して立派な日本人になることだ」と諭される様子が描かれている。表現こそ違え、東京の尋常科低学年も宮崎の高等科一年も言っていることは同じである。大人に教えられたことをそのまま表現しているのである。

ただ、違うのは、文集『日向』の綴方が「こんなよい国に、その上皇祖発祥の靈地に生れ合せた私共は」と、日本国の中でも特に「日向」（宮崎県）に生まれたことを有り難く思うとしているところである。宮崎県の場合、紀元二千六百年は神代三代及び神武東征と色濃く結びついていた。古代日向は神武天皇生誕の地であり、東征軍は美々津港（現・日向市）から出港したとされているからである。

むろん昭和十五年の「紀元二千六百年」は神武天皇即位から二千六百年の意味であり、それ自体が神武東征を踏まえたものであった。神武天皇即位に先立って出されたという詔の言葉「八紘を掩ひて宇と為むこと亦可からずや」、これを八紘一宇の精神とし、日中戦争を聖戦とする拠り所としていたのである。

八紘一宇の精神とは、国文学者の久松潜一によれば「天の下を以て家とする」（「文学と日本精神」^{#2}）の精神である。「天の下」とは日本国だけでなく「日本の皇威の及ぶ所、日本精神の光被する所すべて」である。「天の下を以て家とする」ためには、「まつろわぬものに対しては武を以て討つ事もやむを得ない」と言う。神武天皇の東征が国家創建のために従わぬ者を討つという聖戦だったように、「わが忠勇なる皇軍が支那に於て」「東洋永遠の平和のために武を用ひて居る」のも聖戦なのだという。「紀元二千六百年」は、戦争遂行に向けて、日本人としての自覚を高めるためのものであった。

しかし宮崎県の場合、日本人である前に、「日向人」であるという意識が極めて強かった。日向こそは日本国の基となった「皇祖御発祥の聖地」だという意識である。言ってみれば、挙国一致の前に挙県一致があった。

宮崎県教育会長の菊池武史は、巻頭の「日向の少年少女諸君へ」の中で、紀元二千六百年は特に皇祖御発祥聖地である宮崎県にとっては感慨深いものがあるとし、

「日向の青少年はその昔、神武天皇に御供して御東征に従ひ今日の日本をあらしめたので

あります。私は今日の時局に臨み、特に日向の少年少女諸君に、日本の今日を創建したる祖先の血と気迫を継承して戴きたいと希望するものであります。」

と述べている。皇祖発祥聖地である宮崎県に生まれた子どもは神武天皇を翼賛した人々の末裔である、その気概を持ってというのである。

子どもの綴方にも、それは色濃く反映している。

皇紀二千六百年を迎へて

岩井川校 女子

今年は神武天皇が橿原の宮で御即位の礼おあげになつてから、ちやうど二千六百年目にあたつてゐます。

思へばこの長い――二千六百年の間、日本の国は輝く歴史をつぎ――につくつて、今日まで発展してきたのであります。

私たちの村を流れてゐる五ヶ瀬川も、皇兄五瀬命の名をとられたといふことであります。――雲に聳ゆる高千穂の峰は、何んと美しい尊い峰でせう。

皇紀二千六百年、悠久の国史、何といふ神々しさでせう。尊さでせう。私はたゞ感激で一ぱいであります。

今や、我が日出づる国は、はるかに神武天皇の八紘一宇の御精神を成し遂げやうと、新東亜建設の大使命に、精一ぱいの力をつくして居る時です。(略)

日本の民草、殊に朝日の直さず国、日向に生れた感激と喜びをしみへ感じます。

今日本は日滿支三国が心を一つにして、何処までも限りなく平和に栄えて行く、基礎をつくりあげねばならない時です。

此の三国は東亜新秩序の建設につき進んで居る大切な時であります。

此の目的を達する為、陸に海に空に我が皇軍の勇士は滅私奉公の誠を捧げて居ります。村からもたくさんの勇士が行つてゐられます。役場の助役さんも、本田さんも他の何人もの人が満州義勇軍となつて東亜建設のため行つてゐられます。

それで銃後にゐる私達は、祖国日向に生れた喜びと感激で、毎日の勉強に一生懸命励み、体を丈夫にして皇国の為に少しでも役立つ人とならねばなりません。(略)

日本の祖国「日向」に生れた喜びと感激にうち震えているのだが、「何んと美しい」「何といふ神々しさ」と表現も型にはまっている。教え込まれた感激である。その感激を胸に、一生懸命勉強し、体も強くして皇国のために役立とうというのである。

同様の綴方は外にも多い。都城校女子の綴方「紀元二千六百年に際して」でも、「この日向は、日本の祖国だと思ふと、嬉しくて――感激にたへない次第です。私達は、女ながらも銃後の努をしつかり果し如何程の長期戦にもへこたれない気象を持たなければなりません。」と、同じことを言っている。また、「高千穂の峰の聳ゆるをはるかに遠くの方から見渡す時、思はず『あゝ』といふ歓喜の声が起ります。この国この地に住んで居る事が何よりの幸福です。」とも書かれている。高千穂峰の美しさに歓喜の声をあげたというよりも、皇祖発祥の聖地であると教えられているが故に感激しているのである。

「皇祖発祥聖地」が強調された裏には、宮崎県の後進性があった。「紀元二千六百年」

を機に県民の意識を高め、後進県からの離脱を図ろうとしたのである。主導したのは時の県知事相川勝六である。

昭和十二年七月に宮崎県知事として着任した相川は、宮崎神宮の整備を国の奉祝事業として認めてくれるよう働きかけているのだがどうしても認められないという話を聞かされる。政府はこの頃「紀元二千六百年奉祝会」を発足させ、記念事業として樞原神宮並びに畝傍東北御陵一帯の境域拡張整備を決定していた。一千万円の予算である。このことを聞いた相川は、各方面への猛烈な運動を展開した。神武天皇即位の地である樞原神宮の境域拡張等だけが奉祝事業として取上げられ、神武天皇が長い間建国創業の準備をなした日向の宮崎神宮に対して何等の措置がないのは国家の大義名分上からも極めて公正を欠くと説いてまわった。建国創業の大事業は偶然に成るものではなく、長い間の計画・準備があってこそ成就するものである。その準備がなされた日向の地・宮崎神宮も、共に奉祝事業に加えられるべきだというのがその理由であった（相川勝六「八紘基柱——平和の塔の由来」による）。

その結果、宮崎神宮にも記念事業費約三十六万円が認められた。相川は「金額の多寡ではなく宮崎が奈良と国家的に、同格に取扱われたことが県民を感激にわかせたのである。」と言っている。奈良と「同格に取扱われた」ところに、後進県宮崎の感激があったのである。

ともあれ、樞原神宮と共に奉祝事業に加えられることによって、日向は名実ともに聖地となった。それは聖地日向として全国の目を引きつけ得る可能性を意味していた。

*「紀元二千六百年に輝く聖地日向」 男師付属校 男子

此の神武天皇の御東遷に一番関係しているのは日向です。それがため我々の郷土日向には、名勝旧蹟神社が数かぎりなくあります。

「日向なる小戸の渡の浦こそは青人草の初めなりけり」

と古歌にある通り、祖国日向こそは皇祖発祥の靈蹟として知られてゐます。（略）

かうした皇祖発祥の聖地日向に住む我々は、幸せな生れ合はせに感謝しなければならない。この年を記念する為に今宮崎市では八紘台を建設し、大博覧会をもよほしてゐます。

実に祖国日向のやうに名勝旧蹟の多い県はありますまい。だから我々は、此の名勝旧蹟を保護する事に力をそそがねばならぬ。我等は旧蹟を保護し、研究することによつて、道徳心を養ひ、知識を深くし、此の聖地の発揚につとめるやうにしたいものであります。

この綴方には宮崎神宮を初めとして数多くの名勝旧蹟神社が具体的に挙げられている。それらを保護し研究することによって聖地発揚に努めたいとしているのは、県が奉祝事業の一環として上代日向研究所の設立を計画していたからである。上代日向の研究によって聖地発揚を図りたいという県の意向が、生徒の意見としてそのまま述べられている。

宮崎市に建設中とある「八紘台」も奉祝事業の一つであった。

相川勝六は宮崎神宮の境域整備が認められた後、県としても何か具体的な事業をやらなければ国家に対しても「日向の光栄ある先祖の靈に対しても」相済まないという理由で、「県内全神社の祭典執行、上代日向研究所の設立、県内神武天皇御聖蹟の顕彰、遠祖慰靈

祭の執行」等を決定した。

最も大きな事業は「八紘台」、所謂「八紘之基柱」の建設であった。世界各地から「八紘一宇の大精神に共鳴する内外の人々の熱意の表現たる石を集める、それで日本一の塔を建てる」というものである（「八紘基柱——平和の塔の由来」による。以下同）。

毎日新聞のキャンペーンもあって、縦約四十五センチ、横約六十センチ、巾約十五センチの切石が「県内各市町村はもとより国内各地、朝鮮の各道、台湾の各州、樺太・満州の各省、日支事変ので支那大陸に出征中の各部隊の占領地」「南方諸地域や中南米など世界各地のわが同胞の居住地や、日本と親善関係にあった独逸やイタリーあたりからも続々と集ま」って来た。全部で千七百八十九個である。その結果、宮崎市北部の高台に八紘之基柱は建てられた。神武天皇の皇居跡と言われる皇宮屋の後方に位置する。

相川勝六によると、基柱の高さ百二十尺（約三十六メートル）、敷地面積三千坪（約九千九百平方メートル）である。石の一つ一つに寄贈団体の名前が刻み込まれ、切石は基柱の礎石や石垣に、自然石は庭石として使われた。塔には秩父宮の「御染筆」で「八紘一宇」の文字が刻まれた。昭和十五年十一月の完成である。資金はすべて寄付による。

相川勝六は、紀元二千六百年が宮崎県にとってどのような意義があるのか、『紀元二千六百年奉祝記念と東亜新秩序建設』と題する講演^{註4}の中で、次のように述べている。

「紀元二千六百年は、祖国日向の精神的に物質的に極めて意義深き更生振興の機会が与へられて居るのであります。」

「今回の事業は吾々日向人の精神の集結であり、吾々日向人の手に依つてなし得て初めて意義あるものとなるのであります。日向人としては之より外になすべき事業はなく、又日向人の特性を發揮するに之れほどふさはしき事業はないと思ふのであります。（略）いつ迄も日向は僻遠の地に武陵桃源の夢を食つて現状維持に眠つて居る秋ではない。（略）此際紀元二千六百年記念に当つて、日向維新のために一大勇猛心を振ひ起し、先づこの記念事業の建設から祖国振興の一路へ躍進するやうにしたいのであります。」

（講演速記『紀元二千六百年奉祝と県民の覚悟』による）

相川によれば「僻遠の地に武陵桃源の夢を食つて現状維持に眠つて」いた宮崎県民にとって、紀元二千六百年は「更生振興の機会」だった。これを機に、かつて神武天皇東征に随従し天業を翼賛した祖先を辱かしめないように、「強き覚悟を以て、八紘一宇の大理想実現に向つての国民運動に率先身を挺して其の第一線に立つやうにしたい」というのである。八紘之基柱はその象徴であった。

* 「二千六百年を迎えて」 綾校 男子

或日曜日僕は八紘台にお参りした。（略）畏れ多くも秩父宮の御染筆になるといふ『八紘一宇』の文字を拝して、しみへごと日本に生れた幸福を感じた。又此の八紘の基柱より目を東南に転ずれば、宮崎神宮の神域を拝むことが出来る。神武天皇の御遺跡の数々を偲び奉つた。二千六百年前天皇は此の日向の国に在らせられたのだと思ふ時、僕達の心は勇躍した。聖戦第四年を迎えて、僕は皇軍勇士の武運長久を御祈りして八紘の基柱を後にした。祖国日向に生れて、この意義ある二千六百年を迎え、次代日本を背負つて

立てるだけの立派な日本人として、一生懸命勉強しなければならない。

「僕」は八紘台にお参りし、武運長久を御祈りしている。八紘之基柱は、聖地日向の、そして日向維新の象徴として崇拜の念を抱かせる存在になっていたのである。

古代日向の再生という日向維新の精神は、「ご先祖に恥ずかしくないように」「日向の誇りを持つ立派な日本人になるように」という形で、次代を担う子どもたちの胸に刻み込まれていった。

*「銃後のつとめ」 南郷校 女子

遠い――昔を考へて見ますと、神武天皇が大和を御平定しようとなされ給うた時、日向民族即ち私達の祖先の人達は新しい喜びと深い感激がわいてまゐります。

今年は又聖戦四年目の意義深い年であります。新東亜建設を目標にしてゐる日本は、多大の犠牲を払つて東洋永遠の平和確立に進んで居ります。沢山の兵隊さんが、支那大陸に渡つて勇ましい手柄を立てておられます。特に日向から出られた佐野、木島両部隊は、花々しい功績をあげておられます。これは神代の尊い事業をなされた、祖先の勇士の血を受けてみられるからであります。(略)

私達は現時日本の第二の国民として雄々しい覚悟を抱き、新東亜建設を完成しようと此の栄えある二千六百年の辰の年に固く――誓つて、神代からの輝しい又比類なき日本の国に此の上にも花を咲かせ、日向の誇を高くしなければなりません。

この綴方の中で、活躍する日本の兵隊の中でも特に日向の部隊が華々しい功績をあげているとあるのは、単なる故郷贔屓からではない。聖地日向の人間は「他に優つた日向人」(相川勝六)でなければならない。神武天皇を翼賛した人々の末裔は、大人も子どもも「日向の誇」を高くすることを求められている。佐野・木島の両部隊は「日向の誇」を高くした例として挙げられているのである。

こうした日向維新の精神を子どもにもたらしたのは、むろん大人であり、教育である。

僕等の振興隊作業

細野校 男子

二時間目の自習がすむと、振興隊作業だ。軍馬の甘藷の植付ださうだ。僕は上衣をぬいで用意をし、べんとうを手にして、運動場へ集合した。

いよ――集合ラツパである。振興隊旗奉迎の後、校長先生の訓示があつて「作業は勉強の爲めに行くのである。」とおつしやつた。終つて軍馬補充部の作業場へと行進した。(略)

やがて作業場へ着いた。緑滴るばかりのポプラの前で、作業始めの式があつた。一同宮城を遙拝し、信条を斉唱した。「……勤労を倍加し誓つて祖国振興の柱石たらん。」あゝなんといふ力強い声であらう。皆元気百倍だ。

作業が始つた。僕は脇田君の配つた苗を、植えることにした。一生懸命に植えて行く。しばらくすると、無言合図の呼子になる。みんな黙々として作業をし始る。百米位の列を植えて行くのだ。中々骨が折れる。だが此れ位が何だと、力んでどん――やつた。(略)

食事がすむと、寒さも一時に加つた。かくして今日の作業は終つた。

隊旗の下に集合、さうして天地に響けと 天皇陛下の万歳を三唱し、我が細野校祖国振興隊のオキヨを三唱した。あゝ何といふ気高さだらう。何といふ晴々した気持ちであらう。僕は日本に生れた有難さに胸が一ぱいになつた。

前進め、「国を出てから幾月ぞ」と勇ましく軍歌を歌ひつゝ学校へ歩を進めた。

あゝ僕も何だか銃後の一人として尊い努を果した様な気がする。みんなも嬉しさうだ。

振興隊とは、相川勝六が日向維新実現のために組織した実働隊である。正式には祖国振興隊と言う。勤労倍加運動の中心となり、武陵桃源の夢を食つていた宮崎県民を「更生振興」させるための組織である。昭和十二年十二月の結成で、当初三百二十四隊、隊員数は約五万であつた。一年後には隊数六百三十九隊、隊員は十五万人に増えている。植林、増林、開墾地均し、応召農家への労力補充として稲の植付、麦の種蒔き、刈入れ等が仕事で、現実的な成果もあつたようである。

祖国振興隊には、一般隊、男女青年隊、そして学校隊があつた。小学校隊は五年生以上で組織されていたが、一般隊同様、農作業や開墾、銃後の援護作業を行った。文中の校長訓示に「作業は勉強の爲めに行くのである。」とあるように、それは教育の一環と考えられていた。

第二宮崎校の或る教師は、祖国振興隊の精神について、次のように述べている。

然らばその精神とは何か。それは、天恵の沃土に生まれ、生活の安易を食つて来た県民の怠惰性、非勤勉性を覚醒さすべき精神の警鐘である。而してそれは怠惰性を折伏する堅忍持久の精神であり、生活への真剣さであつた。

吾等県民は、振興隊精神により、各自の精神を高揚させ、祖国日向人としての意識及び、我々祖先の天業翼賛の皇民の、船出の精神への復帰を体得しなければならぬ」

(「祖国振興隊精神とは」『宮崎県教育』昭和十五年一月号)

宮崎県民の怠惰性・非勤勉性を克服し、神武天皇を翼賛した祖先の精神へ回帰することが祖国振興隊の精神だと捉えている。これは、相川知事の考え方そのものである。「天恵の沃土に生まれ、生活の安易を食つて来た県民の怠惰性」という表現も、相川知事の「僻遠の地に武陵桃源の夢を食つて現状維持に眠つて」を言い換えたものにほかならない。

この教師は更に「我等教育家は、日本人としての意識の外に、日向人としての自覚を持たねばならぬ。」と言う。日向人としての自覚とは、「劣等県として、文化程度の低い地方に生を享けた我々県民としての悲憤」を持ち、理想としての県、理想の学校へと変革向上させなければならぬという意識の確立である。教師自身が振興隊精神を充分に体得し、「学習なる作業過程に於て、児童をして皇国の道へ邁進すべき信念の保持者たるべく、振興隊精神によつて共に行ぜねばならぬ。」(「振興隊精神による学習」同前)というのだ。

これが教師の教育観であつた。まさに相川県知事の意を受けて教育が行われていたのである。

「僕等の振興隊作業」に「振興隊旗奉迎」とあるように、祖国振興隊はそれぞれに隊旗を掲げて作業をした。白地の長い旗で、上部に黒い横線が三本引かれ、その下に日の丸が

描かれていた。三本の線は神代三代を表している。

また、振興隊には三箇条からなる信条があり、隊員は皆これを暗記して、事あるごとに斉唱した。

一、我等は皇祖発祥の聖地に生れ天業翼賛の皇民の裔たるに感激す。

一、我等は尽忠報国の精神に満ち義勇奉公の赤誠に燃ゆ。

一、我等は勤労を倍加し誓つて祖国振興の柱石たらん。

日向の民は皇祖発祥の地に生まれたことに、また天業翼賛の皇民の末裔であることに感激しなければならなかった。生徒が綴方の中でやたらに感激しているのはそのためである。

学校振興隊の作業は、それなりにきつかったようである。

*「奉仕作業」 川南校 男子

日はかん〜と照りつける。(略) 二三歩行くともう汗がだく〜出る。(略)

一本々々草を引く毎に服が動いて汗びつしよりの背をなでる。あと少しだ。戦地の兵隊さんの苦労を思ひ、又今日の日本の物資不足を思ひ更に元氣だして取り始めた。(略)

「あゝたまらん。」と時々悲鳴を上げる者も居る。(略) あともう少しだ。戦争に行つたと思へばこの位なんだ。がんばるのは今だと思つて、尚一心に小さい草まで取つた。

*「振興隊作業」 高千穂 男子

暑くて、みんなだらしがなかつたので、丹波先生が「綱を上げる時は、みんなで掛声をかけよ。」と言はれたので僕達は腹一ぱい叫んだ。すると上の方の田の者が見てゐたが、やがて掛声をかけ始めた。それから両方とも負けぬ氣で叫んで居たが、後では疲れて、あまり叫ばないやうになつた。あまり暑いので、みんなだらしがなく植ゑてゐた。

きついというのが本音だろうが、振興隊作業を描いた綴方はいずれも、結局は「此れ位が何だ」「戦地の兵隊さんの苦労を思へば何でもない。」「今日本は非常時で、日本国中の農家は、みんな手不足に違ひない。」と考えて頑張ることになつていた。

しかし「銃後の援護作業」は、現実には有効な戦力たり得たようである。「初夏」という綴方には、農家の「銃後」の実態が描かれている。

下の田圃では、家の前の爺さんが牛を追つて使つてゐられた。若い働手の息子さんが応召されて、此の二三年は、自分の手で頑張つて、やつてゐられるのだ。「息子の分までも働くのだ。」と言つて居られるけれども、よる年はかくせないものと見えて足どりが悪い。応召された人の妻は、「私も二人分だ。」と言つて痛い腰を長く休ませないで、畦を塗つたりくろを打つたりして居られた。「今年も私共が田植えに来てやります。」と、僕が言つたら大へん喜んで居られた。どこの田を見ても、働いて居る人達は、男の年老いた人か、又は女の人達である。下の方では下方の姉さんが、ちか頃牛使を覚えたのだらう。牛を使つて居るが、牛が軽く見下げて居るのか、のろ〜やつて、思ふ通りに行かないで困つてゐた。苗代田の苗も大分伸んで来た。田の中の蛙などはどこにかくれてゐるのだらう。「ぐうだら〜。」と、人を馬鹿にした様に鳴いて居た。(「初夏」土々呂校 男子)

この頃は既に、農家の働き手は老人と女性だけになつていたのである。働き手を兵隊に

取られた家にとって、振興隊作業は大変有り難いものであった。

「田植え」(庄内校 男子)という綴方には、振興隊として手伝いに来てくれた級友たちの仕事を「家の人数だけでは二日もかかる仕事を半日で終った。なんと速い事だ。」と書かれている。掛け声だけではなく、実際に貴重な労働力だったのである。その意味では「きつい・だらしがない」を克服し確かに「更生振興」していたと言えよう。

この外、日向の誇りを高くした人物を想起し、その人物に劣らない立派な人間になる覚悟を示すという綴方も多い。

東諸県郡倉岡校では、谷村計介伍長の生家を修養道場としていた。谷村計介は西南戦争の際、西郷軍に囲まれた熊本城を一人抜け出し官軍に危機を告げた人物として知られる。

谷村計介の像の前に静座し、黙想の後、祖国振興隊朗唱文、祖国振興隊信条の朗唱をした女子生徒は、次のように書いている。

「しみへいと日向の聖地に生れ、天業翼賛の皇民の裔たる感激を新にし、尽忠奉公の精神に満ち、どうしても私等は勤労を倍加し、振興隊の柱石にならねばならぬと心の中に誓ひました。」

「私達は由緒ある谷村修養道場にて、心身を錬磨することが出来ると思へば、こゝで立派に国の御用を努めることの出来るやうに修養し、更に谷村計介伍長におとらない人となるやうに精出さねばならぬと覚悟してゐます。」(「修養会」倉岡校 女子)

また私財を投げ打って用水路を作った村の偉人に対して、
「今の僕達の働では水路を造られた人に対して、すまないと思つた。だからこれから先は国の為に忠義を尽くさねばならないと思ひます。」
とする綴方もある。

いずれも先人を思い、「更生振興」しようとする綴方である。日向維新の教育は、奉仕作業を通して精神・身体両面からなされたのである。

紀元二千六百年は宮崎県にとって、全国の目を祖国「日向」に引きつける絶好の機会であった。それはまた、神武天皇に翼賛した先祖の末裔であることを自覚し、誇りを持ち、八紘一字の精神のもと、宮崎県の向上を促すまたとない機会でもあった。「日本人としての意識の外に、日向人としての自覚を持たねばならぬ。」(第二宮崎校教師)のは、生徒も同じであった。紀元二千六百年の綴方によって「日向人」を自覚し、祖国日向の振興を覚悟したのである。

したがって、皇紀二千六百年記念児童文集『日向』は、単に国家レベルの紀元二千六百年を記念したものではなかった。相川知事の下、県をあげて日本の祖国「日向」を再生させようとする日向維新の記念文集である。宮崎県を再び「誇り高き地」にすべく、子どもたちに自覚と覚悟を促す教育の表れだったのである。そこに記念児童文集『日向』の特徴があった。まさに文集名『日向』の名の通りの文集なのである。

しかし文集『日向』の特徴は、反面、日向維新とは関係のない、あるいはその精神に反するような綴方を掲載しているところにもあった。

特選五十四篇は、その全てが「皇紀二千六百年」や戦争に関係していたわけではない。特選四十五篇の内十一篇は「蛭とり」「初夏の夜」「日記」など、日常生活を描いた一般

的な綴方である。

*「日記」 美々地校 女子

七月九日 火曜 曇

午後五時頃子守も済んだので外に出た。丁度いつも来る魚屋さんが来てゐた。今日は日が照らなかつたので、家の水場の辺で魚をおろしてゐた。やつぱし、半ずぼんである。もとは白かつたのであらう。黒くなつた前掛をして麦わら帽子に手拭をまきつけてゐた。箱の中から、かぼちやを出して、かごに入れて、どうか、釣上つた様な声で、家の前を、

「いらんかい、まるい魚を。ふふふ。」

とごつへした妙な歩き方をした。母も

「いらんよ。」

と買ひながら笑つてゐた。

日記は三日分が掲載されているが、いずれも全く戦時色は感じさせない。紀元二千六百年との関係も全くない。こうした綴方が何故「皇紀二千六百年記念児童文集」に特選として載っているのか不思議なほどである。

また、可愛がっていた馬に徴用が来て、名誉に思いながらも悲しくて仕方がない心を述べた綴方もある。

*「満州へ行つた馬の思出」 生日校 女子

「家の馬は優しい馬でした。田をすく時私がすいても決してはねません。馬の名は平城号と言ふのでした。名も優しいが馬の気だても優しいでした。(略)馬の検査は学校の運動場であつたのです。其の日は検査の事ばかり考へて先生の話は少しも頭に入りませんでした。学校がすむと夢中で走つて帰りました。帰るよりも早く父に馬の様子を聞くと、馬は満州馬とて満州へ行く事になつたと言はれました。『あゝやつぱりとほつた。』嬉しくて心がおどり出しました。馬屋へ行くと、馬は何も知らないで草を食べて居ます。もう馬は家には居なくなるのだがなと思ふと、悲しかつたが、満州へ行くのは名誉であると考へると嬉しかつた。(略)

いよいよ悲しい、嬉しい嬉しい別の日が来ました。朝起きると馬屋へ行きました。私の目は何時しか涙で曇つてゐました。(略)今日が日曜なら送つてやるのにとつくへ思ひました。食事をすまし悲しい心をおさへ仕方なしに学校へと急ぎました。」

家の働き手ばかりでなく、馬も徴用されていたのである。兄に召集令状が来た女子も「私は嬉しいやうな悲しいやうな気がしました。」と書いている。名誉なことだと思えば嬉しいけれども、現実に居なくなることを考えると悲しくてならないというのが偽らざる心境だったのであろう。

兄の出征を素直に喜べない心を描いた、次のような綴方も文集には含まれている。

兄

宮崎校 男子

今は戦地だ。

僕は兄が十九才の時の夏休みに、清武に連れて行ってくれた事を思ひ出して、「兄さんが居た方がやはりいゝなあ。」とつくづく感じる。

清武に行つた時は新町のをばさん所に行つた。そこで十日位泊つて帰つた。十日の間は僕を川に連れて行ってくれたり、おさらひ帳のむづかしい問題を教へてくれたり、夜寝た後など、ふとんをきせてくれたりした。

それから三年の月日は矢のやうに暮れ、^ツ昨年^ツの七月となつた。兄はいよゝ兵隊検査をうけた。兄は甲種合格であつた。検査から帰つて来た兄は「甲種合格でよかつた。」と嬉しそうに父に云つた。父は少し苦笑ひに笑つて母に、「茶でも入れな。」と言つた。

それから三四箇月たつた。

或日兄は「召集で早く行くごつなつたよ。」

と服をたゝみながら父に言つた。

兄に嬉しい召集令状が来たのだ。(略)

僕は旗を持つて駅に向つた。僕達は父からプラツトホームに出るきつぷをもらつた。

僕と今枝君は一緒にホームへ出た。六時何分かの汽車が勢よくプラツトホームへすべりこんだと同時に人が降りた。

兄はすばやく汽車に乗つて、窓から首をだして此方を見てみた。其の時一せいに万歳の声が湧起つた。僕もカーぱいに万歳を叫んだ。

鐘が鳴り出した。出発が一刻々々と迫つてくる。「ピー」と汽笛が鳴つた。

「万歳々々。」僕はその時涙がほゝ伝ひに流れた。

車が動きだした。(略)

汽車は速力を増しだした。

僕は一番最後まで汽車の後を見ていた。

この綴方には兄を兵隊に取られた悲しみが正直に語られている。

甲種合格を喜ぶ兄に対して、家族は誰も喜んではない。「甲種合格でよかつた。」と嬉しそうに告げる兄に、父親は苦笑いをしている。「僕」も兄が喜んでいることは承知しながら、涙を流して見送っている。戦地に行つた今も、優しくつた兄を思い出して、やはり家にいてくれた方が良いなあと思つづく思っている。ここには神武天皇に翼賛した先祖の末裔という「日向人」としての自覚などどこにもない。あるのは神代の時代もそうであらう兵士を送り出す家族側の悲しみだけである。

文集『日向』の表紙には埴輪を思わせる古代武人像が描かれている。これを描いた画家の言葉によると、神武天皇にお供した「上代の日向男児」である。八紘之基柱近くの皇宮屋を訪ねると「御東遷のみぎり、お伴申しあげたであらう勇ましい日向男児の鎧の音も聞こえて来た。」とある。したがって『日向』は、明らかに神武東征を主題にした文集なのである。そこに兄の出征を素直に喜べない綴方が特選として掲載されているのである。

『日向』が発行された昭和十五年と言へば、太平洋戦争に突入する前年である。日中戦争は泥沼化し、前十四年にはノモンハン事件が勃発している。衆議院では戦争政策を批判した斎藤隆夫が糾弾され、大政翼賛会が発会している。日独伊三国同盟が結ばれ、対米戦争への道を決定づけた年である。記念文集の編集方針がどうだったのか詳しいことは分か

らないが、こうした時代に、甲種合格を喜ぶ息子に苦笑いする父親や兄の出征に涙を流す「僕」を描いた綴方を特選にしているのである。

宮崎県の綴方教師たちは、時局にそった綴方を指導しながらも、昭和十五年という時点において、戦争に関係ない綴方や、兄の出征を悲しむ綴方を「佳い綴方」と感じる心を、確かに持ち続けていたのである。

【注】

- 1 1986年11月20日 岩波新書
- 2 『紀元二千六百年』第二巻第一号 1939年1月
- 3 「白樺ポリテクス」№.9 1968年
- 4 1939年3月17日から3日間、宮崎市等において行われた。

(付記)

文集『日向』は宮越利明氏の仲介で児玉信昭氏より御提供戴いた。また石川美すみ氏のご協力も得た。記して感謝の意とする。